

偽りの平和と安定

列王記上 5:1-14

賈 晶淳

今日はアジアサンデーです。アジア教会協議会(CCA)という団体があります。日本基督教団も加盟教会の一つです。CCAはペンテコステの前の週をアジアサンデーと決め、加盟教会が一緒に覚え、祈る日です。百人町教会は毎年、この日の席上献金をアジア基金として使っています。

先週、アメリカのバイデン大統領が来日し、アイペフ(IPEF・インド太平洋経済枠組み)とクアッド(QUAD・日米豪印戦略対話)の二つの会合が日本で開かれました。主にアメリカの利益を守り、中国を排除するための会合です。日本を先鋒に立たせ、韓国をその脇役とし、アジアでのアメリカの影響力を強めようとする覇権主義の産物です。また、今週金曜日にはソウルで日米韓の北朝鮮政策担当者の会議があるという報道がありました。韓国の政権交代で対北朝鮮政策が対立の方向へ変わっています。ロシアのウクライナ侵攻が続いている中、極東では朝鮮半島と中・台の間での緊張関係を高め、対中国バッシングに使おうとしています。特に経済関連では、天然資源の獲得だけでなく、技術や製造分野での競争も激しくなっています。このような動きはちょうど80年前の第2次世界大戦勃発の歴史を思い起こさせます。

本日は真の平和と安定のために働く有能な指導者とはどのような人物かを列王記のソロモン王と関連して学んでみようと思います。ソロモンは先代のダビデ王に続き、統一王国の王となり、知恵と識見を神に求めた(歴下 1:10)といわれています。ソロモンの栄華という言葉に相応しい人物でした。そして、今日の聖書はその繁栄ぶりの内容で、ソロモンの多くの功績を記し、彼を偉大なる人物にしています。

本文の四節と5節を読みますと、ソロモンはとても優れた指導者のように見えます。

ソロモンはティフサからガザに至るユーフラテス西方の全域とユーフラテス西方の王侯をすべて支配下に置き、国境はどこを見回しても平和であった。ソロモンの在世人中、ユダとイスラエルの人々は、ダンからベエル・シェバに至るまで、どこでもそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下で安らかに暮らした。

近隣諸国を支配下に置き、国境はどこも平和であり、人々は自分のぶどうの木といちじくの木の下で安らかに暮らしたという。即ち平和と安定が守られる環境を整えていたということです。そして、真に有能な指導者とはこの平和と安定を当代のみでなく、次の世代にも譲り、続かせる人物だと思えます。

ソロモンの功績をもう少し詳しく見てみます。彼の功績は先代のダビデより優れたものでした。そして、彼の最大の功績の一つとは、やはりエルサレム神殿を築いたことでしょう。13年間の神殿建築については列王記上5章から8章まで記されていて、それはソロモンの関連記事の半分ほどを占める量になります。更に、エルサレムの築城を行ない、自分のためにエルサレム神殿より大きい王宮を建てました。

ソロモンの支配地域は1節です。

ソロモンは、ユーフラテス川からペリシテ人の地方、更にエジプトとの国境に至るまで、すべての国を支配した。国々はソロモンの在世人中、貢ぎ物を納めて彼に服従した。

ユーフラテス川からエジプトの国境に至る地域とは、現在のヨルダン王国やイラクの一部を含む地域を指します。サウル王以来、現代に至るまでイスラエルがこれほど広い地域を領土にしたのはソロモ

ン時代のみです。

また、軍備拡張にも励みました。6節です。

ソロモンは戦車用の馬の厩舎 4 万と騎兵 1 万 2 千を持っていた。

この数値は驚くべきものです。ソロモンは巨大な軍事力をも持っていたという説明です。ただ、エルサレムを始め、ヘブロン、サマリア、ガリラヤなどの殆どが山地であるため、主にろばが重要な移動手段でありましたので、馬が引く戦車や騎兵とは平地での軍備であり、それらは外国からの防御や外国を支配するためのものであったということです。

しかし、このようなソロモンの偉大なる業績と平和と安定は先代のダビデの時から用意されたものであります。本日の箇所ではありませんが5章17節と18節です。

ご存じのとおり、父ダビデは、主が周囲の敵を彼の足の下に置かれるまで戦いに明け暮れ、その神なる主の御名のために神殿を建てることができませんでした。今や、わたしの神、主は周囲の者たちからわたしを守って、安らぎを与えてくださり、敵対する者も、災いをもたらす者もいません。

ダビデの功績についてももう少し申しますと、先代のサウル王は北の10部族の王でありましたが、ダビデはユダやベニヤミン族を入れた12部族の統一王国を築き上げました(サム下5章)。

しかし、何故かこのようなダビデの遺志を受け継ぎ、優れた王のように見えるソロモンについて聖書の記録は厳しいところがあります。それはソロモンが多くの素晴らしい功績を残したとしても、次世代に繋がるものでなかったということです。特に、ダビデから譲り受けた平和と安定を次世代へ譲れず、分裂や混乱のみを残した指導者であったためです。証詞の題を「偽りの平和と安定」とつけましたのはそのためです。

それではソロモンの平和と安定が偽りといえるのはどうしてでしょうか。ソロモンの多くの功績は人民の犠牲の上で成り立つものであります。神殿や宮殿を始め、築城や軍備拡張などには莫大な費用と労働力が必要となります。結局、国の内外からの税収と賦役に頼ることになりますが、実際には収奪や強制によるものであります。それらはソロモンの出である南のエルサレムを中心とするユダとベニヤミンの2部族を除く形で、主に北の10部族からの収奪と強制によるものでした。ソロモンは北の10部族の自治権も奪い、エルサレム中心とする国造りをしたのです(10:26以下)。結局、ソロモン治世には真の平和と安定というのではなく、その結果死後には南北に分かれ分裂王国となり、両部族間の憎悪と混乱だけが残りました(12章以下)。当然なことですがそれまでソロモンが支配下に置いていた地域もすべて消えてしまいます。

今年は太平洋戦争から80年、終戦から77年になります。聖書はダビデの40年とソロモンの40年、合わせて80年間に平和と安定が守られたと記しています。終戦後77年間私たちは先輩らが守り、残してくれた平和と安定の中で過ごしてきました。大変感謝です。しかし、このような観点から現在の米・中・ロ・日・韓の政治的指導者として選ばれた人物らは如何でしょうか。現在の国内外の状況や彼らの政治観や政策から見ますととても不安になります。ロシアのウクライナ侵攻以来ウクライナ戦線は新武器のテスト場となり、世界は武器の売買や軍備拡張のスピードを上げています。中国を始め、日本や韓国も軍事費が大きく膨れ上がっている上に、日本の政治家は核武装の事まで平気でいうようになりました。このような中で人権重視といいながら貧しい人々の生存権は全く無視され、コロナ禍で見たように大国は、弱小国への配慮もなく、自国の利益のみを守るため、世界の分裂や対立を助長しています。私たちは次世代へ平和と安定の世界を残すことができるのでしょうか。それを共に模索し、実践していく世界になりますことを切に祈るのみです。(2022年5月29日証詞より)